

「山の詩人」白居易〔二〕

—— 仙遊山・「長恨歌」・山水画家 ——

諸 田 龍 美

第二稿となる本稿では、三十五歳から三十六歳夏までの期間を対象に、「山の詩人」としての白居易の本質を考察する^{〔1〕}。制科を受験して整屋県尉となり、やがて都に召還され集賢殿校理となった時期にあたる。

永貞二（元和元）年（八〇六）正月十九日に順宗が四十六歳で崩すると、憲宗は改元して「元和」の御代となった。居易は校書郎（正九品上）を辞して元稹とともに長安永崇里の華陽觀に閉居。貞元十年（七九四）以来、十二年ぶりに行われる制科（制挙）受験に備えた。「策林七十五道」（2013〔2092〕）はその際に試作された模擬答案である。万全の準備を整えて才識兼茂明於体用科に応じた居易は、四月二十八日、第四等（実質二位）で及第。整屋県尉を授けられた。元稹は第三等（実質一位）で右拾遺となる。

一 山の詩①——元和元年、仙遊山

五月に整屋県へ着任した居易は、七月には兼務地の昭応県に赴くこととなり、こうした境遇を「趨走の吏」と呼び、嘆いている。「昭応を権撰せしとき、早秋に事を書し、元拾遺に寄せ、兼ねて李司録に呈す（権撰昭応、早秋書事、寄元拾遺、兼呈李司録）」（0394）にいう^{〔2〕}。

夏閏にして秋候早く、七月 風騒騒たり

涓川 煙景晚れ、驪山 宮殿高し

丹陛（朝廷）に子（元稹）は諫を司り

赤県（昭応）に我は徒らに勞す

相去ること半日の程なるも、同に遊邀するを得ず

官に到りて 来十日、鏡を覽るに二毛を生ず

憐れむべし 趨走の吏、塵土 青袍に満つ

郵伝 両駅を擁し、簿書は六曹に堆し

為に問ふ 紀綱の掾（李司録）

何ぞ必ずしも鉛刀（鈍才の自分）を使はん

夏閏秋候早、七月風驟驟。渭川煙景晚、驪山宮殿高。
丹陛子司諫、赤臯我徒勞。相去半日程、不得同遊遨。
到官來十日、覽鏡生二毛。可憐趨走吏、塵土滿青袍。
郵伝擁兩馱、簿書堆六曹。為問紀綱掾、何必使鉛刀。

長安ををさんで東西に離れた二県の尉を兼務することは、新任の居易にとって激務であり、過剰な負担と思われた。尾聯ではその不満を訴えている。任務は夏税の徴収（通常は六月納税）に関するものか。昭応県は今の西安市臨潼区に位置し、近くの驪山華清宮は玄宗が楊貴妃と避寒に訪れた温泉宮として名高い。この離宮を直接目にする地に赴任したことは、五ヶ月後の「長恨歌」制作に影響を与えた可能性がある。

次掲の詩「整屋県の北楼にて山を望む（整屋県北楼望山）」
(0635) は、整屋県に戻つて間もなくの作だろう。自注に「此れより後の詩、畿尉たりし時作る（自此後詩、為畿尉時作）」とある。

一たび趨走の吏と為つて、塵土 顔開かず
平生の眼に辜負して、今朝 始めて山を見る

一為趨走吏、塵土不開顔。辜負平生眼、今朝始見山。
着任以来、東奔西走、整屋県での徴税が済むと、昭応県へ走らねばならなかった。県尉の職務に忙殺され、好きな山を眺める余裕もなく、「今朝 始めて山を見た」というのである。

「山」は県南に陸続と聳える秦嶺山脈。その最高峰が太白山（標高三七六七m）である。一息ついた居易は「李十一建に寄す（寄李十一建）」(0201) を書き、長安の親友李建に、かねての約束通り整屋へ来遊するよう促した。「手を分ちて来^{こゝかた}幾時ぞ、明月三四たび盈つ」「此に及んで新蟬鳴く」の句から、羅聯添は初秋七月の作とみる。詩の末尾にいう、

豈に駕を命ぜんことを思はざらんや、吏職坐に相繫ふ

前期 君 期有り、我を訪うて山城に來たれ

心賞久しく云に阻たる、言約 自ら軽んずる無かれ

相去ること幸ひに遠きに非ず、馬を走らすこと一日の程

豈不思命駕、吏職坐相繫。前期君有期、訪我來山城。

心賞久云阻、言約無自輕。相去幸非遠、走馬一日程。

この頃になると友人を「山城（整屋県）」に招く余裕が生じたのである。そこで宿舎の庭に竹を植え、長安常楽里の時

と同じく（注1の第一稿参照）「閑居」の風情を整えた。

邑に佐たりて意適せず、門を閉づれば秋草生ず

何を以てか野性を娛^{たも}しましめん、竹を種うること百余莖

此の溪上の色を見れば、山中の情を憶ひ得たり

時有りて公事に暇あれば、尽日 欄を繞りて行く

言ふ勿れ 根未だ固からずと、言ふ勿れ 陰未だ成らずと

已に覚ゆ 庭宇の内、稍稍として余清有るを

最も愛す 窓に近く臥せば、秋風 枝に声有るを

佐邑意不適、閉門秋草生。何以娛野性、種竹百余莖。

見此溪上色、憶得山中情。有時公事暇、尽日繞欄行。
勿言根未固、勿言陰未成。已覺庭宇內、稍稍有余清。
最愛近窓臥、秋風枝有声。 「新栽竹」(0395)

新たに竹を栽えた庭は、「山中」を思わせる風情。この情趣を解し得るのは誰か。白羽の矢を立てたのは王質夫であった。

足を濯ふ 雲水の客、腰を折る 簪笏の身

諠閑 跡相背き、十里 別れて句を経たり

忽ち逸興に乗ずるに因り、囂塵を訪ふを惜しむ莫かれ

窗前 故に竹を栽多、君の与に主人と為る

濯足雲水客、折腰簪笏身。諠閑跡相背、十里別経句。

忽因乘逸興、莫惜訪囂塵。窗前故栽竹、与君為主人。

この「王質夫を招く(招王質夫)」(0181)には「此れより後の詩は、整屋尉^た為りし時作る(自此後詩、為整屋尉時作)」と自注があり、『文集』に質夫が初めて登場する作品である。当時彼は仙遊山の溪谷、薔薇澗に住んでいた(後出0645)。そこから整屋県までは「十里(約5.6km)」にすぎないが、もう十日も会っていない。「君のためわざわざ庭に竹を植えた。ぜひ客人としてお招きしたい」と書き送ったのである。八月になると、居易はみずから仙遊山へ足を運ぶ。「秋霖の中、尹縦之が仙遊の山居に過る(秋霖中、過尹縦之仙遊山居)」(0396)にいう、

慘憺たり 八月の暮れ、連連たり 三日の霖

邑居すら尚ほ愁寂たるに、況んや乃ち山林に在るをや
林下に志士有り、苦学して光陰を惜しむ。……

君が寂寞の意を憐れみ、酒を携へて一たび相尋ぬ

慘憺八月暮、連連三日霖。邑居尚愁寂、況乃在山林。

林下有志士、苦学惜光陰……憐君寂寞意、携酒一相尋。

「尹縦之」は不詳だが、仙遊山には、彼のように科挙受験に向け孤独に苦学する者も住んでいたのである。

前稿でみたように、居易は「本性山寺を便とする(山の寺に居ると心身ともに安らぐ)」人間であった(遊藍田山卜居)0250)。ひとたび仙遊山が気に入ると余暇にしばしば訪れるようになった。「仙遊山に遊ぶ(遊仙遊山)」(0663)に、
闇に心地を將て人間(俗世)を出で、

五六年來 人 閑なるを怪しむ

自ら嫌ふ 恋著の未だ全くは尽きざるを

猶ほ雲泉を愛して多く山に在り

闇將心地出人間、五六年來人怪閑。自嫌恋著未全尽、猶愛雲泉多在山。

と。承句に「五六年來」というのは、六年前、貞元十六年(八〇〇)の進士科及第以降を指す。王質夫とともに「林間」に酒を暖めて紅葉を焼き(0715)、「秋に雲居の閣に上」った(0532)のも、この元和元年秋である。

冬にまた山遊に招かれたが、職務のため断るほかなかった。「王十八・李大が山に遊ぶに招かれしに酬ゆ(酬王

十八・李大見招遊山」(0639)にいう、

自ら憐む 幽会 心期の^{くど}阻たるを

復た愧づ 嘉招 書信の類なるを

王事 身を牽いて去り得ず

満山の松雪 他人に属す

自憐幽会心期阻、復愧嘉招書信類。王事牽身去不得、満山松雪属他人。

十一月には冬税を納めねばならない。納税徴収に支障なきよう吏務に忙殺されていたか。「満山の松雪 他人に属す」の句には、「山の詩人」の悔しさがにじむ。

十二月、吏務が一段落した居易は、ようやく仙遊山を訪れ、王質夫や陳鴻と仙遊寺に遊ぶ。「長恨歌」はこの際に作られたが、次節では制作の背景について一つの仮説を提示したい。

二 山の詩②——「長恨歌」

陳鴻の「長恨歌伝」にいう、

元和元年冬十二月、太原の白樂天、校書郎より盤屋に尉

たり。鴻と琅邪の王質夫とは、是の^{むら}邑に家す。暇日、相

携へて仙遊寺に遊ぶ。語りて此の事に及び、相与^{とも}に感嘆

す。質夫は酒を樂天の前に挙げて曰く、夫れ希代之事

は、出世の才の之を潤色するに遇ふに非ずんば、則ち時

と消没し、世に聞こえず。樂天は詩に深く、情に多き者なり。試みに為めに之を歌にしては、如何と。樂天因りて長恨歌を為る。

元和元年冬十二月、太原白樂天、自校書郎尉于盤屋。鴻与琅邪王質夫、家于是邑。暇日、相携遊仙遊寺。語及此事、相与感嘆。質夫拳酒於樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則与时消没、不聞于世。樂天深於詩、多於情者也。試為歌之、如何。樂天因為長恨歌。

この時居易は、煩わしい吏務からようやく解放され、詩人の本性が最も安らぐ「山の寺」において、超俗の「山人」たちと酒を酌み交わしていた。³文字通り「仙遊」の世界に身を置いていたのである。「歌」の後半もまさに「仙遊」世界。仙女となった貴妃が、仙界で道士と対面する場面が展開されている。即ち、現実の場と作品世界は呼応し響き合う。指摘されているように、「長恨歌」の本質は、制作の場・時・状況と、深い関連性を持つのである。⁴

さらに注目すべきは、「歌」における驪山華清宮の重要性である。全百二十句中、驪山華清宮を舞台とする場面が二十句を占める。

①春寒賜浴華清池、温泉水滑洗凝脂。春宵苦短日高起、從此君王不早朝。

②驪宮高処入青雲、仙樂風飄處處聞。漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲。

③七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願作比翼鳥、在地願為連理枝。天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期。

なかでも③は、「長恨歌」（長久なる痛恨（永遠の愛）の歌）の本質に関わる表現である。この場面を、陳鴻「伝」はこう記す。

昔天宝十載、鞏かたに侍して暑を驪山宮に避く。秋七月、牽牛織女相見るの夕べ、秦人の風俗、是の夜に錦繡を張り、飲食を陳ね、瓜華を樹て、香を庭に焚き、号して乞巧と為し、宮掖の間尤も之を尚ぶ。時に夜殆んど半ばなり。侍衛を東西の廂に休ましめ、独り上に侍る。上は肩よに凭りて立ち、因りて天を仰ぎて牛女の事に感じ、密かに心に相誓ふ。願はくは世世夫婦と為らんと。言ひ畢りて、手を執りて各の嗚咽す。此れ独り君王之を知るのみと。因りて自ら悲しみて曰く、此の一念に由りて、又此に居るを得ず。復た下界に墮ちて、且に後縁を結ばんとす。或は天と為り、或は人と為るも、決かたず再び相見て、好合すること旧の如くならんと。

昔天宝十載、侍鞏避暑驪山宮。秋七月、牽牛織女相見之夕、秦人風俗、是夜張錦繡、陳飲食、樹瓜華、焚香于庭、号為乞巧、宮掖間尤尚之。時夜殆半。休侍衛於東西廂、独待上。上凭肩而立、因仰天感牛女事、密相誓心。願世世為夫婦。言畢、執手各嗚咽。此独君王知之耳。因自悲曰、由此一念、又不得居此。復墮下界、且結後縁。

或为天、或为人、決再相見、好合如旧。

この「七夕の夕べにおける男女の密誓」、即ち「願はくは世世夫婦と為らん」の誓願こそは、「長恨歌」の原点にほかならない。したがって、密誓の「時と場」を示した「七月七日長生殿」の句は、「長恨歌」の時空を本質的に規定するものである。「歌」の世界はすべて「七月七日長生殿」の密誓へ向けて展開するのであり、「長恨歌」は、居易が「七月七日長生殿」の時空を定めた瞬間にその産声を上げた、といつてもよい。

しかし、この「七月七日長生殿」は史実ではあり得ない設定であつた。竹村則行氏はこう指摘する。⁵⁾

しかしながら、周知のように、この驪山長生殿での七夕密誓という名場面は、史実としては絶対により得ない文学上の虚飾であつた。則ち、『資治通鑑』や『旧唐書』『新唐書』等の正史の記録を繙いて見ても、玄宗が驪山の華清宮に赴いたのは旧暦十月から数ヶ月に渡る避寒旅行であつて、まだ猛暑の残る七月七日に驪山へ避暑に出かけた記録は何処にも無い。……

何故居易は、密誓の時空を「七月七日長生殿」としたのか。この時空の設定が「歌」の本質と不可分であることを考えると、単に馬嵬近隣の伝承に拠つたと見る通説は、論拠として弱い。竹村氏も指摘するように、「長恨歌伝」に「夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則与时消没、不聞于世」とあ

る、居易の「潤色」、即ち意図的な設定と見るべきであろう。だが、その着想は現実根ざしていたのではないか。

前掲の詩「権摂昭応、早秋書事、寄元拾遺、兼呈李司録」(0394)にいう、

夏閏にして秋候早く、七月 風騒騒たり

渭川 煙景晚れ、驪山 宮殿高し

丹陛(朝廷)に子(元稹)は諫を司り、

赤臬(昭応)に我は徒らに勞す

この詩によれば、元和元年秋七月に居易は昭応県にいた。平岡武夫『唐代の暦』(昭和五二年・同朋舎出版)を繙けば、この年は閏六月があり、七月には例年よりも秋が深まっていた。「長恨歌」制作の五ヶ月ほど前にあたる。両『唐書』地理志によれば、華清宮は昭応県の管轄域にあり(「県」治は温泉宮(華清宮)の西北)に位置した。その県尉を兼ねた居易は、秋七月に昭応県を訪れ、華清宮の間近にいたのである。「夏閏にして秋候早く」の句から推せば、「長恨歌伝」に「秦人風俗、是夜張錦繡、陳飲食、樹瓜華、焚香于庭、号為乞巧、宮掖間尤尚之。」と記す七夕を昭応県で迎えた可能性が高い。

昭応県の華清宮について、居易は元和四年(八〇九)の新樂府「驪宮高し(驪宮高)」(0145)で、こう詠っている。

高高たる驪山 上に宮有り、朱楼 紫殿 三四重

遅遅たる春日、玉鬢暖かにして温泉溢る

嫋嫋たる秋風、山蟬鳴きて宮樹紅なり

翠華来らず 歲月久し、牆に瓦有り……

高高驪山上有宮、朱楼紫殿三四重。遅遅兮春日、玉鬢

暖兮温泉溢。嫋嫋兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅。翠華不来

歲月久、牆有衣兮瓦有松……

指摘されているように、華清宮は当時すでに零落しており、その惨状は中晩唐の詩に多く詠まれている(竹村氏前掲書一四五頁)。この「驪宮高」の詩では「牆に瓦有り」の句が該当するが、この表現は実見に基づくであろう。憶測になるが、元和元年七月に昭応県へ赴いた居易は、職務の合間に零落した華清宮を訪れ、昭応県に住まう「天寶の遺民」から李楊の故事を取材したのではないか。

中晩唐において華清宮は零落してしまい、盛唐の榮華はただその面影を偲ぶだけであったが、中晩唐まで生き延びた天寶の遺民は、盛唐の生き証人として、むしろ積極的に自分の青春の思い出たる楊貴妃故事を聴衆に語り聞かせたのである。先にあげた中晩唐詩人の詠華清宮詩の詩材の供給源は、伝聞の又伝聞も含めて、多くそれら盛唐の遺民であったと考えられる。宋・張翕「驪山記」中に登場する古老も、そのような華清宮楊貴妃故事の語り部の子孫である。……やがてこれらの楊貴妃故事は、白居易「長恨歌」、陳鴻「長恨歌伝」……のような作品に結実してゆくことになる。(竹村氏前掲書一五〇頁)

元和四年の新樂府「新豊の折臂翁」(0133)も、そうした「天宝の遺民」の一人であった。

新豊の老翁 八十八、頭鬢 鬚眉 皆雪に似たり

玄孫に扶けられて店前に向かひて行く

右臂は肩に憑り 左臂は折る

翁に問ふ 臂折れてより来 幾年ぞ

兼ねて問ふ 折るを致せしは何の因縁ぞと

翁云ふ 貫は新豊県に属し

生まれて聖代に逢ひ征戦無し

唯だ聴く 驪宮の歌吹の声、旗鎗と弓箭とを識らず

何も無く 天宝に大いに兵を徴し

戸に三丁有れば一丁を抽く。……

新豊老翁八十八、頭鬢鬚眉皆似雪。玄孫扶向店前行、

右臂憑肩左臂折。問翁臂折来幾年、兼問致折何因縁。

翁云貫属新豊県、生逢聖代无征戦。唯聴驪宮歌吹声、

不識旗鎗与弓箭。無何天宝大徴兵、戸有三丁抽一丁。

……

これはまさに居易自身が天宝の遺民たる「折臂翁」に、腕が折れた理由を取材する場面に他ならない。翁が住まう「新豊県」は、元来「昭応県」と同一の県であったが、天宝三載(七四四年)に分離した近接県である(『新唐書』卷三七・地理志)。居易は元和元年秋七月に昭応県へ赴いた際、「折臂翁」など新豊県の古老からも、楊国忠や玄宗貴妃にまつわる

故事を聞き及んだのではなかったか。だとすれば、五ヶ月後の冬十二月、仙遊寺に遊んだ三名が「語りて此の事に及び、相与に感嘆した」(「長恨歌伝」という李楊の故事中には、居易が秋七月に昭応県域で取材した、当時まだ一般には知られていない「新奇な」話柄が含まれていた可能性がある。それは、「歌」の主要舞台である華清宮の近隣に暮らし、李楊の時代を知る生き証人にしか語り得ない「地元民の生々しい証言」であって、「長恨歌」の魅力を一層高めたであろう。

三 伝記考①——元和二年春、長安へ

元和元年十二月、仙遊山から整屋県に戻った居易は、山から持ち帰った二本の松を県庁前の庭に植えた。「整屋庁前の双松に寄題す(寄題整屋庁前双松)」(0399)にいう、

憶ふ昨 吏たりし日、腰を折りて苦辛多きを

家に帰りて自ら適はず、心神を慰するに計無し

手づから両松樹を栽え、聊か以て嘉賓に当つ

春に垂んとして日に一たび慨すれば

生意 漸く欣欣たり。……

憶昨為吏日、折腰多苦辛。帰家不自適、無計慰心神。

手栽両松樹、聊以当嘉賓。垂春日一慨、生意漸欣欣。

……

これは、元和二年の秋以降に長安へ復帰した居易が、二本の

松に寄せた詩である。「阿松は仙遊山より県庁に移植す（阿松自仙遊山移植県庁）」と自注がある。この二本の松は、居易が「手づから」植え「嘉賓に当」てたというが、詩には「尽日 寂寞たらず、意中 三人の如し（尽日不寂寞、意中如三人）」の句がある。仙遊寺における王・陳との酒宴を記念する松であったかもしれない。

元和二年春には薔薇も庭に移植した。七絶「戯れに新栽の薔薇に題す（戯題新栽薔薇）」（0638）の後半に「少府 妻無くして春寂寞たり、花開かば爾を將つて夫人に当てん（少府無妻春寂寞、花開將爾当夫人）」と詠う。こうした甘美な情想を抱きつつ、居易は一月、長安の楊家に向かった。むろん新作の「長恨歌」を携えていたはずである。

楊家で居易は歓待を受けた。「楊家に宿す（宿楊家）」（0641）にいう、

楊氏弟兄俱醉臥 楊氏の弟兄 俱に醉臥し

披衣独起下高齋 衣を披て独り起つて高齋を下る

夜深不語中庭立 夜深けて語らず 中庭に立てば

月照藤花影上堦 月は藤花を照らし 影は堦に上る

「楊氏弟兄」とは、楊汝士（字は慕巢）と従弟楊虞卿（字は師皇）のこと（『旧唐書』卷一七六、『新唐書』卷一七五に伝がある）。居易は楊汝士の実妹と、翌元和三年の八月以前に結婚する。詩の後半、月影照らす楊家の中庭で、藤花の下に立つ居易は、将来の妻となる女性を思い、おそらく二人は、

やがて寄り添ったのであろう。だとすれば、ここには「長恨歌」の密誓（七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願作比翼鳥、在地願為連理枝）と同じ情趣が、示唆的に再現されていることになる。早く平岡武夫氏はこう指摘されていた。²⁷

なみうつ花の影が東廂の階を一つ一つ上つてゆく。その階の上に彼は佳人の姿を待っているのではないか。藤の花の姿と句は、佳人を思わせる。

……ここにおいて、私はこう思う。長恨歌が製作されたころ、彼はすでに楊氏の女を愛していた。その愛情が長恨歌の上にもうつし述べられた。長恨歌こそは、楊氏の女にささげられた愛の歌である。そしてこの歌は、彼女の心をしつかりと彼に結びつけずにはおかなかったであろう。（一六三・一六六頁）

この春、居易の楊家滞在は三月二十日まで、足かけ三ヶ月に及んだ。その主要な目的は、婚約を固めることにあつたはずである。この時の居易にとって、楊家は「愛とロマンスの館」であつた。「三月二十日に別る」と自注のある「醉中楊六（楊汝士）兄弟に留別す（醉中留別楊六兄弟）」（0642）にいう、

春初携手春深散 春初に手を携へ 春深けて散す

無日花間不醉狂 日として花間に酔狂せざるは無し

別後何人堪共醉 別後 何人か共に酔ふに堪へん

猶残十日好風景 猶ほ残る 十日の好風景

さらに「酔中 整屋に帰る（酔中帰整屋）」(0643)にいう、

金光門外昆明路 金光門外 昆明の路

半酔騰騰信馬廻 半ば酔ひ騰騰として馬に信せて廻る

数日非関王事繁 数日 王事の繁に関はるに非ず

牡丹花尽始帰来 牡丹 花尽きて 始めて帰り来る

こうした陶酔と高揚の背後には、婚約に伴う愛の喜びがあったのである。

十日足らずで晩春三月も尽きなんとするころ整屋県に戻った居易は、しばらくの間、同じ陶酔感に包まれていたようだ。「県南の花下、酔中 劉五を留む（県南花下、酔中留劉五）」(0640)にいう、

百歳 幾廻か酩酊を同じうする

一年 今日最も芳菲たり

願はくは花を將つて天台の女に贈り

劉郎を留取して夜に到つて帰らしめん

百歳幾廻同酩酊、一年今日最芳菲。願將花贈天台女、留取劉郎到夜帰。

居易は翌元和三年の八月以前に楊夫人と結婚する。その際新妻に贈った詩「内に贈る」(032)の冒頭にいう、

生為同室親 生きては同室の親と為り

死為同穴塵 死しては同穴の塵と為らん

「生死を超えた愛」を誓うこの両句は、「長恨歌」の密誓「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝。天長地久有時尽、此恨綿綿

無絶期」と、みごとに響き合っている。「長恨歌」を「楊氏の女にさざげられた愛の歌」とみた平岡氏の指摘は正鵠を射たものであり、「歌」の主題とも深く関わる卓見である。完成した「長恨歌」の最初の読者は、彼女であった可能性が高いであろう。

ところで、この春の長安滞在中の事跡を補記すれば、居易は集賢院校書郎の王起(『旧唐書』巻一六四、『新唐書』巻一六七)とも会っている。「玉薬花を惜しみ、集賢の王校書起を懐ふ有り(惜玉薬花、有懐集賢王校書起)」(0650)に「集賢に警校して閑日無し、瑤花落尽するも君知らざらん(集賢警校無閑日、落尽瑤花君不知)」とある。四ヶ月後の秋七月に、居易が府詩官として長安に召喚され、集賢院校理に転じていることから推せば、長安滞在中、この王起などを通じて、自作の詩を宮中に広めてもらう等の「就職活動」を行った可能性がある。さらに、弟行簡が進士科に及第したのもこの春であった(『唐詩紀事』四に「白行簡字知退、敏而有詞、元和二年登第」と)。合格後の行簡が、南遊して親族(浮梁(江西省)の大兄幼文など)の元に錦を飾ったとすれば、「江南の兄弟に寄す(寄江南兄弟)」(0397)は、行簡に持たせた詩であろうか。また、元和元年九月に没した元稹母の墓誌銘(『唐河南元府君夫人蔡陽鄭氏墓誌銘并序』1467)も、元和二年春二月、長安滞在中に書かれたものである。

四 山の詩③——元和二年、仙遊山

長安から整屋県に戻った居易は、再び仙遊山に登った。「雲居寺に遊び、穆三十六地主に贈る（遊雲居寺、贈穆三十六地主）」（0644）にいう、

乱峰深处雲居路 乱峰 深き処 雲居の路

共蹋花行独惜春 共に花を蹋みて行き独り春を惜しむ

勝地本来無定主 勝地は本来 定主無し

大都山属愛山人 大都おほよ 山は山を愛する人に属す

「雲居寺」は仙遊寺と同じく整屋県境の終南山にある寺。後年（元和十四年）、王質夫との交友を懐古した詩「王質夫に寄す（寄王質夫）」（0532）に「春には尋ぬ 仙遊の洞、秋には上る 雲居の閣」とある。「秋に上る」というのは、元和二年秋にも、再び雲居寺を訪れ、九十歳の山僧から桐の古木について話を聞いているからである（「雲居寺孤桐詩」0011）。先の詩（0644）は、元和二年晩春の訪問を詠じたもの。「穆三十六」は雲居寺一帯を所有する地主らしい。居易は初めて雲居寺を尋ねようとして穆三十六に案内を依頼したのである。ところが「共に花を蹋んで行」ったものの、役目を終えると穆は早々に山を下り、居易は「独り春を惜しむ」こととなった。「景勝地には本来、所有者などおらず、山は山を愛する心を持つ人に属する（その本質的魅力を開示する）」のだ」という感慨は、「山の詩人」たる居易の実感だろう。

「山を愛する人」とそれ以外とを区別する発想は、同時期の他の詩にも見える。「李二十文畧・王十八質夫に期して至らず、独り仙遊寺に宿す（期李二十文畧・王十八質夫不至、独宿仙遊寺）」（0647）にいう、

文畧也従索吏役 文畧は也たた従りて 吏役に索せられ

質夫何故恋囂塵 質夫は何故ぞ 囂塵を恋ふ

始知解愛山中宿 始めて知る解く山中の宿を愛するは

千万人中無一人 千万人中 一人無きを

また「仙遊寺独宿」（0185）にいう、

沙鶴 階に上りて立ち、潭月 戸に当たりて開く

此の中 我を留めて宿せしめ、兩夜 廻ること能はず

幸ひに静境と遇ひ、帰侶の催す無きを喜ぶ

今の独遊より後、人と共に来たることを擬せじ

沙鶴上階立、潭月当戸開。此中留我宿、兩夜不能迴。

幸与静境遇、喜無帰侶催。従今独遊後、不擬共人来。

居易は秋七月に長安へ召還され、十一月には翰林学士を授かるが、年末に長安で詠じた「天門街を過ぐ（過天門街）」（0649）でも、

雪尽終南又欲春 雪尽きて 終南又た春ならんと欲す

遙憐翠色対紅塵 遙かに憐れむ翠色の紅塵に對するを

千車万馬九衢上 千車万馬 九衢の上

廻首看山無一人 首を廻らして山を見るは一人も無し

と詠じている。山への深い愛と山水美への鋭い感受性。それ

らを身につけた詩人が居易であった。それは「千万人中一人も無し」と嘆くほど特異な、芸術家固有の感性であろう。

五 山の詩④——山水画家

この芸術的感性を共有する者として、居易はこの時期、一人の山水画家と出会っている。『歴代名画記』卷十に「画山水甚有意思。為桂林觀察使」と記される蕭祐⁽¹⁰⁾である。蕭祐から居易に手紙と詩が届いたのは、元和元年の晩秋、公務で整屋から駱口駅に赴いていた時であった。駱口駅は、整屋県の西南二十里にある駱谷関のこと。長安から駱谷を経て蜀へと通じる、南山路の入り口に位置する。

居易は整屋県尉の時期に、公事では二度、駱口駅を訪れている。確認すれば「駱口に祇役^{しやく}し、因つて王質夫と共に秋山に遊び、偶ま三韻を題す（祇役駱口、因与王質夫同遊秋山、偶題三韻）」⁽¹¹⁸²⁾は一度目の訪問時、元和元年秋の作。詩にいう、

石は擁して百泉合し、雲は破れて千峯開く

平生烟霞の侶、此の地重ねて徘徊す

今日 勤王の意、一半は山の為に來たる

石擁百泉合、雲破千峯開。平生烟霞侶、此地重徘徊。
今日勤王意、一半為山來。

「烟霞の侶」は、王質夫。「此の地重ねて徘徊す」というの

は、プライベートでは既に訪れたことがあったのだろう。今回は公務での訪問だが、半分は山を楽しむ目的で来た、というのである。

公務による二度目の訪問は、翌元和二年の夏であった。「再び公事に因りて駱口駅に到る（再因公事到駱口駅）」⁽⁶⁴⁶⁾という、

今年（元和二年）到る時 夏雲白し

去年（元和元年）來りし時 秋樹紅なり

兩度 山を見て心に愧づる有り

皆因王事に因つて山中に到るなり

今年到時夏雲白。去年來時秋樹紅。兩度見山心有愧。皆因王事に山中。

「心に愧づる有り」とは、二度とも俗事（公務）での訪問となり、「山に対して済まない」という慚愧の念（良心の呵責）である。ちなみに、元稹が元和四年（八〇七）三月、東川への使者として駱口駅を訪れた際の詩「駱口駅二首」の自注には「……北壁有翰林白二十二居易題『擁石・関云』、『開雪・紅樹』等篇、有王質夫和焉。王不知是何人也。」とある。このうち「擁石・関云（雲）」は、前掲した元和元年秋の白詩⁽¹¹⁸²⁾の「石擁・雲破……開」を、また「開雪・紅樹」は、元和二年夏の白詩⁽⁶⁴⁶⁾の「夏雲白・秋樹紅」を指すであろう。

さて、公事では初めて駱口駅を訪れた元和元年の秋、居易

は王質夫と共に駅の山館に宿泊していた。その時、蕭祐から手紙が届いたのである。『旧唐書』本伝に「善く琴を鼓し詩を賦す」とあるように、蕭祐は詠詩にも長けていた。「駱口駅に祇役し、蕭侍御の書の至るを喜び、兼ねて新詩を觀て、吟諷すること通宵、因りて八韻を寄す（祇役駱口駅、喜蕭侍御書至、兼觀新詩、吟諷通宵、因寄八韻）」(043)にいう、

日暮れて心は無聊、吏役 正に営営たり
 忽ち驚く 芳信至り、復た新詩を并すに
 是の時 天に雲無く、山館に月明有り

月下に詠むこと数遍、風前に吟ずること一声
 一たび吟じて三四たび歎じ、声尽きて余清有り
 雅なる哉 君子の文、性を詠じて情を詠ぜず
 始めて信ず 韶濩（殷の湯王が定めた典雅な音楽）を聴けば
 心をして和平ならしむべきを

日暮心無聊、吏役正営営。忽驚芳信至、復与新詩并。
 是時天無雲、山館有月明。月下誦數遍、風前吟一声。
 一吟三四歎、声尽有余清。雅哉君子文、詠性不詠情。
 始信聽韶濩、可使心和平。

翌二年初夏には、仙遊谷に住む王質夫が、長安の蕭祐と長安から盤屋県に帰って間もない居易の二人に宛てて、詩を贈っている。これに唱和した白詩が「王十八が薔薇澗の花時、蕭侍御を懐ふ有り、兼ねて贈らるるに和す（和王十八薔薇澗花時、有懷蕭侍御、兼見贈）」(0645)である。

霄漢風塵俱是繫 霄漢（蕭祐）風塵（居易）俱に是れ繫

薔薇花委故山深 薔薇 花委ちて 故山深し

憐君獨向澗中立 憐む 君（質夫）独り 澗中に立ち

一把紅芳三処心 一たび紅芳を把りて三処の心あるを

居易と蕭祐の交友は王質夫を交えて始まったが、次の詩は二人で唱和したものだろう。「蕭侍御の「旧山の草堂を憶ふ」詩を見、因つて以て継ぎ和す（見蕭侍御「憶旧山草堂」詩、因以継和）」(0183)の後半にいう、

珠玉は信に美為るも、鳥は其の中を恋はず
 台中の蕭侍御、心は鴻鶴と同じ
 晚起 多を冠するに慵く、閑行 聽を避くるを厭ふ
 昨山を憶ふ詩を見るに、詩思 浩として窮まり無し
 帰夢は杳として何れの処ぞ、旧居は洛水の東
 秋は閑なり 杉桂の林、春は老ゆ 芝朮の叢
 自ら云ふ 山に別れし後、離抱 常に忡忡たりと
 衣繡は采ならざるに非ず、持憲は雄ならざるに非ず
 樂しむ所は此に在らず、悵望す 草堂の空

珠玉信為美、鳥不恋其中。台中蕭侍御、心与鴻鶴同。
 晚起慵冠多、閑行厭避聽。昨見憶山詩、詩思浩無窮。
 歸夢杳何処、旧居洛水東。秋閑杉桂林、春老芝朮叢。
 自云別山後、離抱常忡忡。衣繡非不采、持憲非不雄。
 所樂不在此、悵望草堂空。

所樂不在此、悵望草堂空。

詩中の「多を冠す」「聰を避く」「繡を衣る」「憲を持す」は、いずれも御史台・侍御史の職務についていう。「帰夢」は、故郷（旧山）に帰る夢。帰山の夢。長安での官僚生活になじめず、「旧山の草堂」を懐かしむ蕭祐の心境に、同情と共感を寄せた作品である。「自ら云ふ 山に別れし後、離抱 常に仲たたりと」の句は、山水美を愛する芸術家が、権勢の中心たる宮城で官僚となつている不適合感の表明。「山の詩人」居易の共有する感覚であつた。

翌三年夏に詠まれた次の詩「夏日独り直して蕭侍御に寄す（夏日独直寄蕭侍御）」(1193)では、山水画家蕭祐への共感は、より一層顕著である。この時居易は左拾遺・翰林学士として既に長安に復帰していた。

憲台（御史台）は文法の地、翰林は清切の司

鷹猜 野鶴（蕭祐）に課し、驥徳 山麋（居易）に求む

課責同じからずと雖も、同じく宜しき所に非ざるに帰す

是を以て方寸の内、忽忽として暗に相思ふ

夏日 独り直に上り、日長くして何の為す所ぞ

澹然として他念無く、虚静 是れ我が師

形は有事に委して牽かるるも、心は無事と期す

中憶は一に以て曠く、外累 都て遣るるが若し

地貴くして身覚えず、意閑にして境来り随ふ

但だ松と竹とに對すれば、山中に在る時の如し

情性 聊か自適し、吟詠 偶々詩を成す

此の意 夫子（蕭祐）に非ざれば、余人 多くは知らず

憲台文法地、翰林清切司。鷹猜課野鶴、驥徳求山麋。

課責雖不同、同帰非所宜。是以方寸内、忽忽暗相思。

夏日独上直、日長何所為。澹然無他念、虚静是我師。

形委有事牽、心与無事期。中憶一以曠、外累都若遺。

地貴身不覚、意閑境来随。但对松与竹、如在山中時。

情性聊自適、吟詠偶成詩。此意非夫子、余人多不知。

詩の前半「課責 同じからずと雖も、同じく宜しき所に非ざるに帰す」の句は、現職への不適合感を二人が共有していることをいう。しかし、心中に「無事」の境地を実現できてさえいれば「意閑にして境来り随ふ」のであつて、たとえ宮中に居ても「但だ松と竹とに對すれば、山中に在る時の如し」である。だが、この境地を理解できるのは「夫子（蕭祐）」ぐらいのものだ、というのである。

この詩によれば、居易は、翰林院に宿直しながら、自適の境地を心中に実現し「閑適詩」を詠じていた（情性 聊か自適し、吟詠 偶々詩を成す）。その頃、蕭祐もまた、御史台の壁に「山水画」を画いていた。羊士諤の「台中遇ま直し晨に蕭侍御（蕭祐）の壁に山水を画くを覽る（台中遇ま直し蕭侍御壁画山水）」詩（『全唐詩』卷三三二）にいう、

虫思庭莎白露天 虫思 庭莎 白露の天

微風吹竹曉凄然 微風 竹を吹き 曉凄然たり

今来始悟朝迴客 今来 始めて悟る 朝より迴る客

暗写帰心向石泉 暗に帰心を写して石泉に向かふを

同じく大明宮内にある翰林院と御史台に勤務しながら、居易は閑適詩で「山中に在る時の如し」と吟じ、蕭祐は「壁に山水を画」いていた。二人の感性の共鳴を確認できる事実である。前年（元和二年）整屋県尉であった時、居易は「官舎小亭の閑望」（0187）の末尾でこう詠っていた。

数峯太白の雪、一卷陶潜の詩

人心各の自らはとし、我が是とするは良に茲に在り

廻つて謝せん名を争ふ客に、甘んじて君が嗤ふ所に従す

数峯太白雪、一卷陶潜詩。人心各自是、我是良在茲。

迴謝争名客、甘従君所嗤。

共に「太白の雪」（や「陶潜の詩」）の滋味を共感しうる知己（蕭祐）は、却つて、名利の地・長安に居たのである。⁽¹⁴⁾

六 小結——独善・兼濟の葛藤

本稿の目的は、三十五歳から三十六歳夏までの作を中心に、「山の詩人」としての白居易の本質を浮き彫りにすることであった。制科を受験して整屋県尉となり、やがて都に召還されたこの時期、居易は独善と兼濟、二つの理想の間を揺れ動いていた。

元和二年夏、「時に整屋県尉たり」と自注された諷諭詩「麦を刈るを觀る詩（觀刈麦詩）」（0006）において、困窮する

農民を目の当たりにした居易は、その苦衷をこう詠じている。

田家 閉月少なし、五月 人倍ます忙し……

力尽きて熱きを知らず、但だ夏日の長きを惜しむ……

復た貧婦人有り、子を抱き其の傍らに在り……

其の相顧みて言ふを聴けば、聞く者 為に悲傷す

家田は税を輸すに尽きたれば、

此れ（落穂）を拾うて飢腸に充つと

今我 何の功德ありてか、曾て農桑を事とせず

吏録 三百石、歳晏れて餘糧有るや

此れを念ひて私に自ら媿ぢ、尽日忘るる能はず

田家少閉月、五月人倍……力尽不知熱、但惜夏日長……

復有貧婦人、抱子在其傍……聽其相顧言、聞者為悲傷。

家田輸税尽、拾此充飢腸。今我何功德、曾不事農桑。

吏録三百石、歳晏有餘糧。念此私自媿、尽日不能忘。

困窮する農民から税を取り立てることは、県尉たる居易の職務であった。詩の末尾に示された慚愧の念は、農民への同情と良心の呵責であり、長安復帰後に量産された諷諭詩の源泉の一つにはかならない⁽¹⁵⁾。その理想を実現するためには、中央官僚に復帰して長安に住む必要がある。そこには婚約者も待ちわびていた。しかし居易は、長安復帰を手放しに願っていたわけではない。例えば、「時に整屋県尉たり。府に趨きて作る」と自注された詩「京兆府に新たに蓮を栽う（京兆府

新栽蓮」(0012)の後半では、京兆府門前の汚溝中に、色香も失せて咲く蓮の花を見て、こう詠う、

物性すら猶ほ此くの如し、人事亦宜しく然るべし

根を託する其の所に非ざるは、棄捐せらるるに如かず

昔 溪中に在りし日、花葉 清漣に媚ぶ

今来たれば地を得ずして、府門の前に顛頓たり

物性猶如此、人事亦宜然。託根非其所、不如遭棄捐。

昔在溪中日、花葉媚清漣。今来不得地、顛頓府門前。

この蓮の姿には居易自身が投影されていよう。根を託すべき所、即ち、自己の本性に適した地を得ることは、居易自身にとつて切実な課題であった。そして彼が心引かれるのは、長安ではなく、蓮と同じ「溪中(山中)」なのである。

次掲した「月燈閣に暑を避くる詩(月燈閣避暑詩)」(0013)

も、同じく元和二年夏の作。正式な召還の前に長安へ一時的に出てきた際の作品であろう。猛暑を避けようと長安延興門外の仏閣に上った居易は、詩の後半をこう結んでいる。

行く行く都門の外、仏閣正に岩^上巖^下たり

清涼 高きに近づいて生じ、煩熱 静に委^よひて銷^ゆ

襟を開き軒に当たって坐せば、神泰らかに意飄飄たり

帰路の傍らを廻看すれば、禾黍^{かよ}尽く枯焦す

独善 誠に計有るも、何を将てか早苗を救はん

行行都門外、仏閣正岩巖。清涼近高生、煩熱委静銷。

開襟当軒坐、神泰意飄飄。廻看帰路傍、禾黍尽枯焦。

独善誠有計、将何救早苗。

自己の本性に適う「仏閣」(や「溪中」)に想う「独善」は、「本性山寺を便とする」居易にとつて、一つの理想である。しかしそれでは、辛苦する農民を救う「兼濟」の理想は実現できない。こうした矛盾・葛藤を抱えつつ、居易は、元和二年秋七月、長安へ召還されたのであった。

注

- (1) 第一稿は、「山の詩人」白居易(二)——生涯から三十四歳まで——「愛媛大学法文学部論集 人文学編」第五十号、二〇二二年。
- (2) 本文は岡村繁『白氏文集 一〜十二下』(新釈漢文大系・第97〜119巻、明治書院)に拠ったが、漢字は新字体に改めた。作品には花房英樹『白氏文集の批判的研究』(粟文堂書店、一九六〇年)による作品番号を付した。
- (3) 居易は王質夫・陳鴻のことを、「王山人」(0205詩)、「陳山人」(0420詩)とも呼ぶ。山人と「長恨歌」との関係性については、金文京「白居易の酒と茶の詩——山人文学の視点から——」『白居易研究年報』(第十八号、二〇一七年)参照。
- (4) 澤崎久和著『白居易詩研究』(二〇一三年、研文出版)第三章「白居易と仙遊寺——長恨歌——成立の舞台と背景」に詳しい。
- (5) 同氏著「楊貴妃文学史研究」(二〇〇三年、研文出版)三〇九頁。
- (6) 居易が楊虞卿と初めて知り合ったのは、貞元十五年(七九九)に宣城で郷試に応じた際であった(羅聯添『白樂天年譜』(国立編訳館・一九八九年)参照)。
- (7) 同氏著『白居易——生涯と歳時記』(一九九八年、朋友書店)「白居易とその妻」。

(8) 『寶治通鑑』卷三三七・憲宗元和二年に「整屋尉・集賢校理白居易作樂府及詩百余篇、規諷時事、流聞禁中。上見而悅之、召入翰林為學士。」と。

(9) これは後に宋の蘇軾が「前赤壁賦」で「且夫天地之間、物各有主、……惟江上之清風、与山間之明月……取之無禁、用之不竭、是造物者之無尽藏也。而吾与子之所共食。」と詠じた発想の先駆であろう。

(10) 以下に『旧唐書』卷一六八の本伝を引用するが、名は「祐」に作る。『新唐書』卷一六九にも簡略な伝がある。

蕭祐（祐）者、蘭陵人。少孤貧、耿介苦学、事親以孝聞。自処士徵拜左拾遺、累遷至考功郎中。祐（祐）博雅好古、尤喜图画。前代鍾・王遺法、蕭・張筆勢、編序真偽、為二十卷。元和末進御、優詔嘉之、授兵部郎中。出為饒州刺史、入為太常小卿、転諫議大夫。踰月為桂州刺史・御史中丞、桂管防禦觀察使。大和二年八月、卒于官、贈右散騎常侍。祐（祐）閑澹貞退、善鼓琴賦詩、書画尽妙、遊心林壑、嘯詠終日、而名人高士、多与之遊。給事中韋温尤重之、結為林泉之友。

(11) 通説では「元和二年の作」とするが、同年秋七月には任官され長安に帰っている。「元年初の作」と見る羅聯添の説がよい。

(12) 同じ元和二年の詩「病假中、南亭の閑望（病假中、南亭閑望）」(184)にも「始めて知る吏役の身は、病まざれば閑を得ざるを。……西簷竹梢の上、坐して見る太白山。遙かに愧づ、峯上の雲、此の塵中の顔に對するを（始知吏役身、不病不得閑。……西簷竹梢上、坐見太白山。遙愧峯上雲、對此塵中顔）」とある。

(13) 『中国古典文学基本叢書 元稹集（修訂本）上冊』（中華書局・二〇一〇年）卷十七。

(14) 居易が山水画を含む絵画を好み一言を有していたことは、例えば貞元十九年三十二歳の作「画に記す（記画）」(147)に「時予在長安中、……乃請觀於張（敦簡）。張為予尽出之。厥有山水・松石・雲霓・鳥獸、暨四夷・六畜・妓樂・華虫咸在焉。……」とある。澤崎氏前掲書「白居易と絵画」参照。

(15) 整屋尉尉として自ら税を取り立てた際の苦衷は、「論和羅状」(195)にも「臣、近ごろ畿の尉と為りて、曾て和羅の司を領す。親ら鞭撻して、觀るに忍びざる所なり（臣近為畿尉、曾領和羅之司。親自鞭撻、所不忍觀）」とある。

（原稿受付 二〇二二年一〇月七日 掲載決定 二〇二二年一月一九日）